本文

官報

第百五拾九號　明治十七年一月十二日　土曜日

太政官文書局

○達

府縣

○内務省
農商務省乙第壹號

明治十四年第六拾三號布告ヲ以テ褒章條例被定候ニ付テハ十三年内務省乙第四拾三號達賞與屆式ヲ廢シ十六年分ヨリ左ノ書式ニ照準シ毎年一月ヨリ十二月迄ノ分取調翌年二月限可屆出此旨相達候事

但難破船ニ原因シタル人命救助及ヒ墾田等ニ關スルモノハ農商務省ヘ其他ハ渾テ内務省ヘ屆出候儀ト心得ヘシ

明治十七年一月十二日

内務卿　山縣有朋
農商務卿西鄕從道

明治何年自一月至十二月賞與取調書

人命救助之部

褒章授與之者　族籍　姓名

〔事蹟ヲ記入スルノ場所〕

同　同

同　同

合計　何人

第159号　本文

第159号 本文

同	飾版授與之者		同	
合計			何	人
同	金杯ヲ賜フ者	〔杯ノ個數組數ヲ記入スルノ場所〕	同	
合計			何	人
同	銀杯ヲ賜フ者	同	同	
合計			何	人
同	木杯ヲ賜フ者	〔杯ノ等級及個數組數ヲ記入スルノ場所〕	同	
同		同	同	
合計			何	人
同	金圓ヲ賜フ者	〔賜金ノ員數ヲ記入スルノ場所〕	同	
合計		何圓	何	人
同	褒狀ヲ與フル者		同	
同			同	
合計			何	人
總計			何	人

德行卓絕之部
前例ニ準ス

成績著明之部
前例ニ準ス

出金之部

	金杯授與之者				
〔事蹟ヲ記入スルノ場所〕		〔出金ノ員數ヲ記入スルノ場所〕	〔杯ノ個數組數ヲ記入スルノ場所〕	同	
同		同	同	同	
合計		何圓		何	人
	銀杯授與之者				
同		同	同	同	
合計		何圓		何	人
	木杯授與之者				
同		同	〔杯ノ等級及個數組數ヲ記入スルノ場所〕	同	
同		同	同	同	
合計		何圓		何	人
	褒狀ヲ與フル者				
同		同		同	
同		同		同	
合計		何圓		何	人
總計		何圓		何	人

記載例

一本書ハ一人ヲ一行ニ記入スルモノトス

一本書ハ渾テ行賞セシ年ニ從テ登記スルモノトス故ニ其年ニ出金セシ者ト雖モ其年內ニ行賞セサリシ者ハ翌年ノ分ニ登記スヘシ年賦出金者モ之レニ準ス

一事績ハ其賞與ヲ受クヘキ事柄ヲ記スヘシ例ヘハ

人命救助之部
火災ニ燒死セントスル者ヲ救）ノ類
水中ニ溺死セントスル者ヲ救）

德行卓絶之部

孝子
順孫
節婦
義僕
ノ類

成績著明之部

疏河
築堤
修路
墾田
學校設立
貧院設立
ノ類

出金之部

某廳若クハ某所
某病院又ハ某學校
貧民賑恤
罹災救助
ノ類

一族籍ハ國郡區町村華士族平民（勳位アルハ勳位）ノ別ヲ記スヘシ

一姓名ハ何ノ誰ト記シ非戸主ハ戸主ノ名ト續柄ヲ肩書ニスヘシ町村組合會社等ニテ聯合出金シタルハ某町某村某組合某會社ト記スヘシ

一褒章ハ紅綠藍綬ノ區別ヲ記スルニ及ハス且沒收者ハ年月日沒收ノ事由族籍姓名ヲ表尾ニ附記スヘシ

一杯ハ其杯ノ等級及ヒ數（一個或ハ三個）ヲ順次ニ從ヒ記入スヘシ

一地所米穀物品勞力等ヲ以テ寄附ニ充タルハ當時ノ相場ニ依リ之レカ價額ヲ算出シ以テ出金ノ段ニ揭ケ其物品ハ左傍ニ併記スヘシ

一用紙ハ常用罫紙ヲ用フルモ適宜タル可シ

○海軍省丙第六號

海軍一般

今般太政官第五號ヲ以テ月俸規則第貳拾貳條被廢候ニ付テハ明治六年九月甲第百八拾六號省達消滅ニ屬シ候義ト可相心得此旨相達候事

明治十七年一月十二日

海軍卿　川村純義

○司法省丁第壹號

大審院
裁判所

勳章年金褫奪及停止取扱手續ノ儀ニ付太政官ヨリ左ノ通被達候條此旨相達候事

明治十七年一月十二日

司法卿　山田顯義

司法省

別紙陸軍省伺勳章年金褫奪及停止取扱手續ノ儀朱書ノ通及指令候條此旨相達候事

明治十六年十二月廿八日

太政大臣三條實美

（別紙）

勳章年金褫奪及停止取扱手續之儀ニ付伺

先般勳章年金褫奪及ヒ停止取扱手續御達相成候處其以前卽チ本年第二十二號御布告後第三十九號御達迄之間ニ於テ右ニ適該スル者アルモ勿論該手續ニ準據ス可カラサル儀ト相心得可然哉之旨伺出候處右ハ本年第二十二號布告發布後ハ第三十九號達ニ據リ處分スル儀ト可相心得旨御指令之趣敬承仕候然ルニ該手續第二條ニ據レハ勳章褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノト有之候處右第二十二號御布告後第三十九號御達迄之間ニ於テ已ニ輕重禁錮ノ處分ヲ受ケ又ハ已ニ其刑滿期後之者ト有之右等ハ如何ノ手續キヲ以テ褫奪方取扱可然哉至急何分ノ御指揮相成度此段更ニ相伺候也

明治十六年十一月十五日

陸軍卿　大山　巖

太政大臣三條實美殿

第159号　本文

（朱書）
伺ノ趣本年第二十二號布告後第三十九號達發表以前ニアツテ既ニ刑ノ言渡ヲナシ未タ勳章褫奪ノ手續ヲナサヽルモノハ該達第三條ノ手續ニヨリ更ニ其罪狀及刑名ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘキ儀ト可相心得事

明治十六年十二月廿八日

○司法省丁第貳號　　大審院　裁判所

長崎縣下肥前國南北松浦西彼杵三郡ノ内平島外五島ハ海路險惡航通不便ニシテ他ト同視難致島地ニ付布告布達施行期限ハ該島ヘ到達ノ翌日ヨリ起算致度趣其筋ヨリ伺出候處北松浦郡宇久島ノ内平村神浦小値賀島ニ限リ御聞届相成候旨太政官ヨリ被達候條此旨相達候事

明治十七年一月十二日　　司法卿　山田顯義

○賞勳敍任

○明治十六年八月廿五日

丁抹國大北部電信會社長カピテーンオフロ
ヤルデーニシュネビー

敍勳二等贈與旭日中綬章

エドワルド、スウェンソン
丁抹國大北部電信會社ノ代理總管事
ギヨルヂ、ヨハン、ヘランド

敍勳五等贈與雙光旭日章

○明治十六年十二月廿日

任判事　判事補　錦織　義弘

○明治十六年十二月廿七日

任長野縣警部長　千葉縣一等屬正七位　大野　右仲

○明治十六年十二月廿八日

任五等驛遞官　驛遞一等屬　寺田　一郎

任五等驛遞官　驛遞一等屬　山田　雪助

○伺指令

○内務省

滋賀縣ヨリ監視之儀ニ付伺

通常監視ニ付セラレタル者ニシテ他管下ヘ旅行且ツ滯在スル節取締方之儀ハ刑法附則第二章中ニ明文モアリ且本縣ヨリ伺定置候次第モ有之候得共住居地管内旅行ニ就テハ別ニ取締方法無之然ルニ力役等ヲ以テ糊口ヲ爲スモノヽ如キハ其業体ノ都合ニ依リ住居地町村最寄ニ於テ其職業ニ從事スルヿヲ得ス數里外ナル他ノ警察署下ヘ數十日出稼スルモノアリ右等ノ者ニ至テハ毎月兩度居住地ノ所轄警察署ヘ謹愼ヲ表スル爲メ出頭スルハ時日ヲ費シ糊口上ニ困難スル趣ヲ以テ出稼地ノ所轄警察署又ハ分署ヘ出頭謹愼ヲ表シ度旨出願スルモノアリ右ハ事實憫然ノ至リニ付之ヲ許可シ其旨出稼先キノ所轄警察署又ハ分署ヘ通牒監視致シ候モ御差支之筋無之候哉相伺候也

明治十六年九月廿五日

指令

伺之趣事情無據者ニ限リ許可シ不苦儀ト可心得事

明治十七年一月九日

○司法省

樺戸集治監ヨリ證據物品處分方之儀ニ付伺

第一條　已決囚徒入監ノ節所持之物品ヲ情願ニ任セ司獄官吏ヨリ他ニ賣却シタル後餘罪發覺シ右物品ハ曩ニ犯罪ノ用ニ供シタルモノナル時ハ其公商公賣ニアラサルモノ之ヲ買取ルト雖𪜈沒收スルノ限ニ無之候哉

第二條　總テ證據物品裁判所ノ管轄地外ニアル片ハ其管轄裁判所ニ囑托シ送付ヲ求メ可然哉又其送付費用ハ何レノ裁判所ニテ支辨シ可然哉

第三條　前條送付シタル物品裁判濟ノ上還付ノ云渡ヲ爲シタル時其言渡ヲ受クル者裁判所ノ管轄地外ニ在ル片ハ其所轄裁判所ヘ囑托シ還送致可然哉果シテ然ラハ其運送費ハ何レノ裁判所ヨリ支辨ス可キ儀ニ候哉

右相伺候條至急御裁令相成度候也

明治十六年十二月五日

指令

第一條　見込ノ通

第二條　治罪法第六十一條ニ從ヒ司法警察官檢察官又ハ裁判官ニ囑託スルヿヲ得但送付費用ハ囑託ヲ受ケタル官署ニ於テ支辨ス可キモノトス

第三條　囑託ヲ爲ス迄ノ運送費ハ其官署ニ於テ支辨シ囑託ヲ爲シタル以後ノ運送費ハ囑託ヲ受ケタル官署ニ於テ支辨ス可シ

明治十七年一月十一日

○大審院判決

○宣告

大坂府西區江戸堀北通三丁目四拾八番地士族

三宮　寅衛（明治十五年十月十五年十一月）

明治十五年十月十二日大坂輕罪裁判所ニ於テ被告事件ヲ審理シ被告三宮寅衛ハ明治十五年八月八日巡査北山仁三郎カ其職務ヲ以テ官署ノ命令ヲ執行スルニ當リ暴行ヲ加ヘ毆傷シ且其目前ニ於テ侮辱シタル者ト判定シ刑法第百三十九條第百四十條第三百一條第三項第百四十一條ヲ適用シ犯時十二歲以上十六歲未滿ナルヲ以テ刑法第八十條ニ依リ各本刑ニ二等ヲ減シ仍ホ數罪俱發ノ例ニ照シ刑法第百三十九條ノ罪ヲ重シト爲シ重禁錮三月ニ處シ罰金五圓ヲ附加ストノ言渡ヲ爲シタリ

被告三宮寅衛ハ右裁判ニ對シ上告ヲ爲シタリ其趣旨タルヤ原裁判所ハ被告ノ所爲ヲ以テ官吏其職務ヲ行フニ當リ暴行ヲ加ヘタル者トシ刑ヲ適施シタリト雖巡査北山仁三郎等カ懇親會ニ臨撿シ之ヲ制止セントシタルハ大坂府丙第百九十八號布達ノ趣旨ヲ誤解スルニ因ルモノニシテ全ク其職務外ニ渉ル處置ナレハ官吏其職務ヲ以テ官署ノ命令ヲ執行スル場合ニアラサルヿ明白ナリ又其官吏ニ對シ暴行ヲ以テ抗拒シタルヿ更ニ之レナキ而已ナラス其暴行ノ證ト爲サレタル負傷ナルモノハ醫師ノ鑑定書ニ心悸亢盛ト在ルヲ謂フナラン何ソ心悸亢盛ヲ以テ負傷ト謂フヲ得ヘケンヤ且巡査ハ用ナキ者ナリ云々ノ言語ヲ發シタル覺之レナク更ニ一歩ヲ讓リ發語セシ者ト假定スルモ之ヲ

第159号　本文

以テ侮辱ノ言語ト謂フヲ得サルハ多辨ヲ要セスシテ明ナリ然ルニ原裁判所カ被告事件ノ要點ニ付直接ノ關係ヲ有セサル景況書及不備ノ鑑定書等ヲ心證ニ資リ以テ有罪タルノ認定ヲ爲セシハ不當ノ最甚シキモノニシテ乃チ事實理由ノ齟齬及擬律ノ錯誤ニ係ル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ

原裁判所撿事補宮崎多喜衞ハ上告論旨ニ對シ逐一之ヲ辨駁シ到底其効ナキモノト思量スル旨答辨セリ仍テ治罪法第四百二十五條ニ基キ立會撿事池上三郎ノ意見及被告代言人吉永聰ノ陳述ヲ聞キ判決スル左ノ如シ

本案上告ノ理由ハ分テ四個ナリトス其一ハ官吏其職務ヲ以テ官署ノ命令ヲ執行スルノ塲合ト謂フヲ得ストノヿ其二ハ暴行ヲ以テ抗拒シタルニアラストノヿ其三ハ心悸亢盛ヲ以テ負傷ト爲スヲ得ストノヿ其四ハ侮辱トナルヘキ言語ヲ發シタル覺ナシトノヿ是ナリ而シテ其第二第四ノ論點ハ專ラ原裁判所カ正當ノ証憑ニ據リ認定シタル事實ノ當否如何ニ涉ルヲ以テ上告ノ原由ト爲スヿヲ得ス何トナレハ諸般ノ証憑ヲ採擇シテ事實ヲ判定スルハ原裁判官ノ特有スル權內ニ屬シ越權ノ處分アラサル以上ハ輙ク其當否如何ニ論及スルヲ得サルナリ又大坂府丙第百九十八號布達ノ趣旨ニ基キ懇親會ノ如キモ之ヲ制止スルハ警察官ノ職權內ナルヿ著明ナレハ其職務外ニ涉ル不當ノ處分ナリトノ論旨モ是亦採用スルニ由ナシト雖モ上告第三ノ理由ニ付訴訟書類ヲ鑒查スルニ原裁判所カ據テ以テ創傷ノ証ト爲シタルモノハ醫師ノ鑑定書ナリ而シテ其鑑定書ニ（外部異狀ナシ然ルニ心部ヲ聽診スルニ心悸亢盛ヲ認ム）云々ト在ル而已ニシテ其他創傷ヲ成シタリト見ルニ足ルヘキ証佐一モアルヿナシ然ルニ何ヲ以テ負傷セシメタル者ト認定セシ歟抑モ法律ニ所謂創傷トハ身体ノ內部又ハ外部ヲ毀損スルノ謂ニシテ心悸亢盛ノ如キ內臟機關ノ作用其常度ヲ失ヒタルヲ謂フニ非サルナリ故ニ本件被告ハ官吏ヲ毆打シタルマテニシテ其毆打ニ因リ負傷セシメタルニ非サルヿ論ヲ俟タス而シテ其毆打ノ所爲ハ暴行ノ一手段ニシテ乃チ暴行ヲ以テ官吏ニ抗拒スルノ罪ヲ組成スル情狀タルニ過キサレハ必ス之ヲ別個ノ犯罪トシテ罰スルヲ要セサルナリ然ハ則チ原裁判所ニ於テ被告ハ官吏其職務ヲ行フニ當リ暴行ヲ以テ抗拒シ且言語ヲ以テ侮辱セシ者トシ刑法第百三十九條第百四十一條第八十條第百條ヲ適用シタルハ至當ナリト雖其毆打ノ所爲ヲ別罪ト爲シ刑法第百四十條及第三百一條第三項ニ照シ處斷セシハ畢竟創傷ノ義解ヲ誤リ爲メニ擬律ヲ錯誤シタル不法ノ裁判ニシテ則チ治罪法第四百十條第十項ニ當ル上告ノ原由有ルモノト判定ス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百三十一條ニ基キ原裁判言渡中毆打創傷事件ニ係ル部分ヲ破毀シ之ヲ取消スモノ也

大審院ニ於テ撿事池上三郎會立宣告ス

裁判長判事　鳥居　斷三
專任判事　小村壽太郎
判事　伴　正臣
判事　薄井　龍之
判事　園田　弘
書記　香田　能興

明治十六年十二月二十八日

○宮廷錄事

○豫ネテ　仰出サレシ如ク昨十一日元老院ヘ　親臨開院式ヲ擧行セラレ左ノ勅語ヲ賜リタリ

朕爰ニ親臨シテ開院ノ典ヲ行フ汝衆議官等能朕ノ意ヲ體シ尙益勉

勵アランヿヲ望ム

當日供奉ハ二品嘉彰親王、二品能久親王、三條太政大臣、川村參議、德大寺宮內卿、香川宮內少輔、內閣大書記官金井之恭、宮內大書記官兒玉愛二郎、式部權頭櫻井能監、四等掌典長崎省吾、其ノ他侍醫侍從等ニテ開院式ノ次第ハ左ノ如シ

元老院開院式

一　本日午前第八時本院幷先着ノ式部官員大禮服着用參院
一　午前第九時三十分先着ノ親王大臣參議及諸省勅任官各大禮服着用參院
一　午前第九時三十分　御出門鹵簿第二公式
一　臨幸ノ報ヲ得テ先着ノ親王以下本院諸員等奉迎ス（親王及勅任官ハ門內奏任官ハ門外）
一　便殿ニ　着御　本院奏任官以上　拜謁
一　式部ノ報ヲ得テ議長副議長幹事議官書記官席ニ列ス
一　大臣參議及諸省勅任官幷ニ內閣書記官席ニ列ス
一　式部頭　出御ヲ奏請ス
一　出御式部頭先導親王宮內卿輔扈從ス
一　衆員敬禮ス
一　御着床先導扈從各其席ニ列ス
一　立御　勅語アリ議長副議長幹事議官書記官敬禮ス
一　入御衆員敬禮ス
一　先導扈從初ニ准ス
一　還幸
一　奉送初ニ准ス
一　衆員退散ス

以上

○官廳彙報

○河瀨司法大輔ハ去ル九日豐前國小倉ニ着シ翌十日福岡ヘ向ケ發程シタル旨報告アリタリ

○東京憲兵本部長憲兵中佐三間正弘ハ今回大阪府下ヘ憲兵ヲ設置セラルヽニ付管區配置屯所位地等取調ノタメ去ル九日大阪ヘ出發シタリ

○撿查官長岡義之參事院議官補男谷忠友ハ去ル九日各左ノ通仰付ケラレタリ

恩給局御用掛兼勤被仰付候事　撿查官　長岡　義之
恩給局御用掛兼勤被仰付候事　參事院議官補　男谷　忠友

○判事手塚吉康ハ昨年十二月十二日ニ同禰津恂同錦織義弘ハ同廿日ニ長野縣警部長大野右仲ハ同廿七日ニ各左ノ通仰渡サレタリ

自今年俸七百八拾圓下賜候事　判事　手塚　吉康
自今年俸七百八拾圓下賜候事　判事　禰津　恂
年俸六百六拾圓下賜候事　判事　錦織　義弘
月俸七拾圓下賜候事　長野縣警部長　大野　右仲

○內務省准奏任御用掛石黒五十二ハ昨十一日文部省ニ於テ左ノ通仰付ケラレタリ

內務省御用掛　石黒五十二
文部省御用掛兼勤被仰付取扱准奏任候事
（內務省御用掛兼文部省御用掛）　石黒五十二
東京大學理學部勤務被仰付爲手當一ヶ年金百貳拾圓給與候事

○日蓮宗妙滿寺派管長少敎正山岬日曉ハ敎務用ニ付去ル二日上京シ千葉縣下總國小御門神社宮司津田總右衞門群馬縣上野國貫前神社

第159号　本文

宮司猶部光澄、神奈川縣相摸國鶴岡八幡宮宮司筥埼博尹ハ社用ニ付去ル八日孰レモ上京シタリ

○參照

○內務省農商務省乙第壹號達參照

乙第四拾三號

賞與及ヒ濟貧恤窮施行濟屆方ノ儀追々相達置候儀（九年乙第四十六號同年乙第九十九號十年乙第二十號）モ有之候處本年七月以後施行ノ分ハ左ノ心得ヲ以テ取調毎年七月ヨリ翌年六月マテ壹周年ノ分別紙書式ニ準シ可屆出此旨相達候事

但警察上盡力ノ者賞與取扱ノ儀ハ從前ノ通リ

（屆書取調心得及ヒ書式略ス）

○海軍省丙第六號參照

甲第百八拾六號

第三百拾壹號御布告有之候ニ付テハ艦內敎授役外三上長以下免職幷病死之節賜金ノ義モ來十月一日以後ハ右ニ照準下賜候條此旨更ニ相達候事

○正誤

○官報第百五十七號伺指令欄內文部省報告東京大學伺法學部別課法學科規則第二條課目中國際法ノ下括弧內（公法、私法）ヲ除クノ外其ノ他課目ノ下括弧內ハ都テ衍

官報第百五拾八號七丁下段第九行目勸業課ノ業ハ衍又同號拾六丁下段第二拾三行富山縣報告ハ農商務省ノ誤

○兵事

○軍艦發着（海軍省報告）　扶桑金剛ノ兩艦ハ去ル九日神戶ヲ發シ翌十日橫濱ヘ着シタリ

○衛生事項

○犬疫（札幌縣報告）　札幌縣日高國浦河郡荻伏、後邊戶、姉茶、野深ノ四箇村ニ於テ昨年十一月中一種ノ犬病流行シ畜犬ノ斃死セシ者凡百餘頭ニ及ヘル旨仝十二月五日同郡役所ヨリ報知セシニ付獸醫ヲ派遣シ其ノ病況ヲ視察セシメタルニ英語「ヂステンプアー」ト稱シ犬猫等肉食獸ノ幼穉ナルモノ或ハ逸居セル愛犬ニ多ク感染スル特異ノ病毒ニシテ加多兒性ノ熱ナリ今ヤ氣候寒冱ニ際セルヲ以テ病勢大ニ衰ヘ殆ト消滅ニ歸セリ

○農工商事項

○泥炭肥料（農商務省報告）　泥炭ハ邦語（スクモ）英語（ヒ井ト）ト稱ス雜草類殊ニ苔類ノ水或ハ風ノ爲ニ蘆及菰草ノ類ト混化シ累積シテ土塊ノ如キ狀態ニ變シタルモノニシテ通常山谿ノ土隙江河ノ岸底等水ノ淹留スル處ニ堆積ス越後國阿賀、信濃、三面ノ諸川頸城魚沼等ノ山間ニハ泥炭多ク產出シ就中中蒲原郡小口村ニ產スルモノハ其ノ色濃褐色ニシテ重量甚大ナリ然レトモ住民未之ヲ使用スルノ念ナキヨリ此ノ地ニ多ク產スルヲ知ラス又其ノ何物タルヤヲ察セサルモノ多シ今其ノ功用ヲ擧クレハ歐米ニ在リテハ之ヲ燒キテ炭或ハ灰トナシ又日光ニ曝シ以テ肥料ニ供ス校舍病院旅店等ノ如キハ之ヲ厠中ニ散布シ以テ臭氣ヲ消滅セシム而シテ之ヲ肥料ニ供センニハ秋季之ヲ取來リ先ッ煉瓦狀ニ截斷シ冬間堆積シ置キ翌春ニ至リテ之ヲ用フ其ノ堆積ノ際五分ノ泥炭ニ一分ノ石灰或ハ木灰ヲ混シ屢〻糞汁或ハ尿水等ヲ注キ上下反覆シテ之ヲ乾燥セシメ其ノ散布ニ便ナル適宜ノ度ニ至レハ之ヲ圃壤ニ施スヘシ然レトモ此ノ肥料タル米麥等ノ穀類ヨリモ蘿蔔蕪菁ノ如キ根塊類ニ効驗尤多シ既ニ昨年同縣下ノ一農之ヲ厩肥ニ混シテ近江蕪菁及米國馬鈴薯ニ施シヽニ殆ト貳倍ノ收納アリタリト云フ

○茶業擴張（岡山縣報告）　岡山縣美作國英田郡ハ村數五拾七ケ村ニシテ製茶ノ產額凡拾七八萬斤ヲ降ラス米穀ヲ除クノ外該郡中物產ノ冠タルモノナリ近來粗製ノ聞アルヲ以テ一二ノ有志者發起人トナリ昨年七月製茶營業人及栽培人ヲ會シ茶事改良申合規則ヲ定メ本年ヨリ實施センヿヲ約定セシニ昨年九月神戶港製茶共進會及集談會ヘ臨場セシ同郡萬善村青山平四郎外貳名ノ者同會ニ於テ一層ノ感覺ヲ增シ同郡長池田長準ニ謀リ且勝南和氣兩郡ノ同業者ト協議シ昨年十二月廿二三四日ノ三日間全郡倉敷村ニ於テ同業會ヲ開設シ更ニ茶事改良申合仮規則ヲ定メ且審査所並ニ販賣委托所等ヲ設ケ益縣下ノ茶業ヲ擴張セントス

○日本酒釀造法（農商務省報告）

製麴

澱粉ノ質ハ水ニ溶セサルカタメ醗酵力モ之ヲ釀シテ酒トナスヲ得ス是ヲ以テ麥酒ヲ製スルニハ先ッ麥ヲ以テ麥芽（モヤシ）トナシ澱粉ヲシテ糖類ノ一種ナル飴糖ニ化セシメ以テ釀造ノ資トナスナリ蓋麥芽ハ糵麥（ヲホムギ）ヲ水ニ浸シ之ヲ煖所ニ移シテ微シク萌芽ヲ發セシメ水液ヲ澱粉ノ膠液中ニ和シテ以テ飴糖ニ化成シ之ヲ名ケテ化糖母ト云フ夫我カ日本國ニ於テ酒ヲ釀ス所ノ麴ハ恰モ西洋諸國ニテ麥酒ヲ造ルニ麥芽ヲ用フルト一樣ナルカ如シ抑〻麴ヲ造ルニハ第一ニ地下壹丈五尺乃至貳丈ノ深處ニ於テ延長貳丈五尺乃至三丈許ノ口形半月狀ナル坑ヲ堀リ之ヲ麴室トナス是ノ室ハ丈餘ノ地中ニ在ルヲ以テ其ノ熱ヲ傳遞スルヿ自ラ微少ニシテ一旦熱ヲ得ルトキハ則容易ニ冷却スルヿナキノミナラス其ノ温度ハ敢テ外氣ノ變化ニ應セス常ニ平順ヲ持スルノ便アルヲ以テナリ然ルニ尋常造酒家ノ麴室ハ之ニ異ナリ家屋ノ中ニ於テ厚ク壁土ヲ塗閉シ小戶ヲ設ケ藁席ヲ垂レ以テ出入ノ口トナス恰モ踈築ナル小土藏ノ如シ故ニ十分ノ温度ヲ保ツヿ能ハス

麴ヲ製スルニハ白米ヲ洗滌シテ盡ク其ノ糠粃ヲ去リ而シテ大桶ニ貯ヘ水ニ浸スヿ一夜粒々膨脹スルヲ度トシ更ニ之ヲ大桶ニ移ス此ノ桶下底ニ多ク小孔ヲ穿チ麻布ヲ其ノ中ニ敷キタル者ナリ而シテ之ヲ大釜ノ上ニ置キ烈火ヲ以テ釜中ノ湯ヲ沸騰セシムルトキハ小孔蒸氣ヲ導キ桶中ノ米粒蒸シテ强飯（コハメシ）トナル斯ノ如クスレハ米粒軟靭ニシテ彈力ヲ帶ヒ粒中ノ澱粉ハ渾テ膠柔質トナルナリ已ニ其ノ度ヲ察シ强飯ヲ藁席ノ上ニ攤布シ力メテ凝塊ナカラシメ飯粒ヲ放冷シ略ホ攝氏貳拾九度內外ニ至ラシメ是ニ於テ麴種ヲ施スモノトス夫此ノ種ヲ播スハ大概四斗ノ米ニ貳才ノ比例ヲ以テ先ッ三四握ノ冷米ニ混和シ洽ク全席ニ撒徹セシメ既ニ此ノ順序ヲ了スルトキハ蒸米ヲ將テ之ヲ麴室ニ移シ温度最高カラサル所ニ就キテ再ヒ藁席ニ攤布シ覆フニ藁席ヲ以テシ則日沒ヲ度トシテ止ム翌日詰旦室ニ入リテ之ヲ閱スレハ其ノ温既ニ攝氏貳拾五六度ニ達ス可シ日午ニ至リ此ノ米ヲ籠中ニ盛リ室外ニ出シ復席上ニ攤布シ而シテ之ニ冷水ヲ放注シ了リ室蓋（ムロフタ）ノ大小ニ隨ヒテ各若干ヲ容レ室內ノ兩棚下ナル土上ニ排列シテ以テ翌日午前五時ヲ待チ漸次棚上ニ移ス其ノ室蓋ヲ積置スルニハ恰モ小丘ノ如クシ午前九時乃至十時ニ及フトキハ麴種次第ニ生長シ纖毛揃譬互ニ相固着シ

第159号　本文

第159号 本文

テ以テ華氏百六度餘ノ溫熱ヲ發シ之ニ因リテ活力ヲ損スルカ爲ニ時々室蓋ノ中ヲ攪拌シテ以テ其ノ平鋪ヲ要ス凡此ノ順序ヲ了スレハ麴ノ溫度五六度ヲ減スルナリ故ニ之ヲ回復センカタメ再ヒ丘狀ヲ造リ午後一時ニ及ヒ復碎塊ノ手術ヲ施シ午前八時ニ至ルトキ亦前ノ手續ヲナス既ニ此ノ如クスルトキハ溫度ハ華氏九拾度內外ニ在リ第四日ノ午前五時ニ及ヒテ花蕤芃々全ク麴トナル此ノ時之ヲ室外ニ出シ更ニ前夜ノ蒸米ヲ室蓋ニ盛リ之ヲ室內ニ納メ以テ新陳互ニ相代謝セシムルヲ要ス乃チ此ノ方法ニ據ルトキハ米粒ノ凝固ヲ防キ麴芽ノ度外ニ生長スルヲ遏メ適度ノ麴ヲ造ルヿヲ得ルナリ既ニ麴室ノ業ヲ創ムル時ニ於テ或ハ薪火ヲ用ヒ或ハ熱湯ヲ盛ル所ノ桶ヲ用ヒテ熱ヲ充タスト雖既ニ其ノ業ニ就クニ於テハ他ノ熱ヲ藉ラス米粒自ラ蒸シテ室內ノ空氣ヲ煖メ常ニ室外ノ度ニ比シテ其ノ高キヿ華氏四拾四五度ニ達ス抑〻此ノ熱度ノ起ル源因ヲ索ムルニ是皆麴粒中ノ炭素水素ノ抱合シテ氣狀トナルニ因ルナリ蓋此ノ炭酸瓦斯ノ生スルモノヲ撿スルニ至リテ左ノ簡便ノ法アリ

先ツ壹升五六合許ヲ容ル可キ大瓶ノ口ニ木栓ヲ嵌メ硝子管ヲ以テ栓中ヲ貫キ瓶內ノ空氣ヲシテ自由ニ出入セシメ管ノ外端ニハ更ニ樹膠（ゴム）管ヲ装着シ以テ其ノ口ヲ緊閉ス麴ノ將ニ熟セントスル時一掬ヲ取リテ此ノ瓶中ニ入レ右ノ栓ヲ以テ其ノ口ヲ塞キ而シテ管端ヲ固封シ以テ室中ニ置クヿ四時間ヲ過クル後他ノ麴ハ塊々鶴氅ヲ被ルカ如キモ瓶中ノモノハ此ノ如クナラサルヲ見ル此ノ時瓶中ノ酸素ハ悉ク消盡シテ炭酸瓦斯トナリ竟ニ良麴ヲ得ルヿ能ハサルナリ今百度ノ溫熱ニ乾シタル者ヲ標準トシ前二種ノ麴ノ成分ヲ撿スルニ左表ノ如シ

			甲種	乙種
水ニ溶クルモノ	甲種ニハ百分中 三七〇七六 乙種ニハ 六九〇四五	澱粉糖	二五〇〇一	五八〇一〇
		糊精	三〇八八	四〇四一
		可溶性灰	五二	五四
		全蛋白質物	八〇三四	六〇四〇
			九〇八四	八〇二三
水ニ溶ケサル者	甲種ニハ 六二〇二二 乙種ニハ 三〇〇五一	不溶性蛋白質物	一〇五〇	一〇八三
		全灰	九	四
		澱粉	五六〇〇〇	二六〇二〇
		纖維	四〇二〇	一〇九四
		脂肪	四三	五〇
總計			九九〇九八	九九〇九六

燥サヽル前ノ水量ハ　二五〇八二　二八〇一〇

右表ニ據ルトキハ白米ニ比スレハ澱粉ノ量著シク減少セリ是他ナシ其ノ澱粉タリシ者多少澱粉糖或ハ糊精ニ變化スルヲ以テナリ麴既ニ鬱蒸スルノ際米粒幾分ハ氣發シ去ルニ因リ其ノ原資ノ米ト麴トヲ比較スルトキハ自ラ重量ノ減少スル理アリ今之ヲ實驗スルニ白米三斗ノ秤量拾壹貫四百三拾匁アリ此ノ米ヲ以テ麴トナスニ及ヒテハ其ノ秤量ハ拾貳貫三百八拾匁トナル然ラハ則チ秤量ハ却テ增加スルカ如シト雖米ハ元ト百分ノ中ニ於テ拾四〇四ノ水ヲ含ミ麴ハ貳拾九〇五ノ水ヲ含ム故ニ若シ之ヲ乾シテ前二者ヲ比較スレハ實ハ白米百匁中ニ於テ拾壹匁ヲ減シ正ニ八拾五匁八分ノ米ヲ以テ七拾六匁四分ノ麴ヲ製シ得ルニ過キス意フニ此ノ減量タルヤ全ク米ニ含有スル澱粉カ氣化飛散化スルニ原クナル可シ果シテ然ラハ白米百匁ヲ以テ麴トナストキハ則チ拾八匁ノ炭酸瓦斯ヲ發ス可シ蓋シ冬期ノ製造ニハ一日平均拾貳貫八百四拾匁ノ白米ヲ要シ其ノ鬱蒸ニ因リテ發スル所ノ炭酸瓦斯ノ全量ハ貳貫四匁ナル可シ而シテ之ヲ容ルヽニ於テ拾貳石ノ容積ヲ要ス然ルニ麴室ノ廣サ百拾六石八斗七升ノ容積タルニ至リテハ瓦斯ハ空氣ノ活力ヲ妨ケ不純氣中ニ在リテ麴花ハ十分ノ生長ヲ得ス工人ハ自ラ此ノ中ニ入ルヿ能ハサルナリ故ニ其ノ適度ヲ要センニハ室口ノ一所ニ於テ地面ニ通スル竪孔ヲ穿チ溫氣ハ此ヨリ昇リテ外ニ出テ冷氣ハ此ヨリ降リテ內ニ入リ冷溫ヲシテ互ニ相交換セシム可シ但シ冬日ハ內外ノ寒暖異ナルヿ著シキヲ以テ交換自在ナレトモ夏天ハ其ノ差著シカラサルヲ以テ其ノ自在ヲ得サルカタメ火ヲ孔口ニ焚キ空氣ノ運動ヲ起サシムルヲ要ス蓋シ夏候ハ多量ノ麴ヲ製セサルヲ以テ或ハ此ノ流通法ヲ行ハサルモ亦可ナリ

釀酒

攝津國伊丹西ノ宮等大酒造家ノ釀造法ハ略ホ相同シク毎段ノ區別モ亦判然トシテ條理アリ他ノ小酒造家ニテハ之ヲ二段ニ分ツノミ即首段ハ本酛造（モトツクリ）本段ハ酒釀是ナリ西洋法麥酒ノ釀造ハ之ヲ二段ニ分チ前段ハ澱粉ヲ溶スルヨリ始メ化糖母ヲ消滅スルニ止ル後段ハ專ラ醞釀ヲ事トス乃日本酒ハ開釀後一二日ヲ除ク外ハ澱粉溶解ト醞釀ト並行ハル故ニ麥酒ノ如ク外段ニ隨フコト能ハス是二者ノ方法自ラ異ナル所以ナリ抑〻清酒ノ酒精ヲ含ムコト麥酒ヨリ多キハ蓋之カタメナラン

伊丹及西ノ宮等釀酒法分段左ノ如シ

一本酛造ノ段　（首段）
二添ノ段
三中ノ段　（本段）
四仕舞ノ段
五絞搾及澄清

凡此ノ分段ノ內本酛造ヲ以テ最肝要トス此ノ時若シ注意疎ナルトキハ全功ヲ覆スノ患ヲ免レス

本酛造（酒釀首段）ニ用フル品物ハ米麴水ノ三品ニシテ其ノ分量タルヤ酒家ニ因リテ異同アルヲ免レスト雖要スルニ左法ヲ以テ製シタル酛液ヲ本酛ト稱ヘ其ノ一回ニ製スルモノヲ一本酛ト謂フ乃米麴水ノ分量ハ左ノ如シ

蒸米五斗	麴貳斗	水六斗	總計壹石貳斗

右蒸米ト麴ノ貳品ハ蒸熟後ノ分量ニアラス其ノ原資タル白米ノ豫量ナリ

又西ノ宮ノ一本酛分量ハ左ノ如シ

蒸米五斗	麴貳斗	水六斗三升	總計壹石三斗三升

又東京府內濁酒製造家ニ於テ一本酛ト稱フル者左ノ如シ

蒸米四斗	麴壹斗六升	水四斗	總計九斗六升

今此ノ混合物ヲ取リテ試ニ乾米（百度ノ熱ニ燥シタル者）ト水トヲ分析スレハ左ノ如シ但シ水壹石重量四拾八匁米壹石重量四拾貫匁トス

白米（蒸）拾六貫匁	同（麴）六貫四百匁	水拾九貫貳百目

右白米ハ百ニ付拾四ノ水ヲ含ム之ヲ蒸セハ三拾八〇八即百ニ付殆ト四拾ノ水ヲ增ス然ルトキハ拾六貫匁ノ米ヲ蒸セハ水六貫四百匁ヲ增シ之ニ未蒸前ニ含ム所ノ水貳貫貳百四拾匁ヲ合スレハ其ノ水量八貫六百四拾匁トナル又此ノ貳貫貳百四拾匁ヲ拾六貫匁ヨリ減スレハ乾米ノ量拾三貫七百六拾目ヲ得ルナリ又白米百匁ヲ麴トナストキハ百八匁トナル故ニ此ノ比例ヨリ推ストキハ則六貫四百匁ノ白米ハ六貫九百匁ノ麴トナル可キナリ而シテ此ノ量ノ麴ニハ無論乾米四貫八百三拾匁水貳貫七拾匁ヲ含ム可シ故ニ一本酛ノ比例ハ左ノ如シ

乾米ノ全量（拾三貫七百六拾匁　四貫八百三拾匁）	拾八貫五百九拾匁	
米麴蒸鬱ノ爲ニ吸取リタル水	拾貫七百拾匁	貳拾九貫九百拾匁
別ニ加ヘタル水	拾九貫貳百匁	

又本醋百ニ付乾米ハ三拾八〇三水ハ六拾壹〇七ニ當ルト云フ

抑〻米麹水ノ三品各其ノ分量ニ隨ヒ盡ク混合シ之ヲ半切桶貳斗六升七合量六個ニ分付シ始ハ手ヲ以テ攪拌シテ其ノ結塊ヲ碎クヘシ既ニシテ此ノ三品ハ自ラ糊漿狀ヲ呈シ漸ク調和スルニ隨ヒテ蕩融稀液トナル此ノ如クシテ二時間ヲ過クレハ暫ク手ヲ輟メ尚二十四時ヲ過クル後器械ヲ以テ液中ニ殘存スル所ノ粒塊等ヲ壓碎シ全ク液汁トナルヲ俟ヒ數桶ノ液ヲ集メテ之ヲ大桶ニ盛リ藁席ヲ以テ周圍ヲ包ミ冷氣ヲシテ侵透セシメス最初ヨリ玆ニ至ルノ溫度ハ常ニ攝氏零度ヨリ拾度ノ間ニ昇降ス此ノ際現ル、所ノ化學的作用ハ麹液糊膠質ノ澱粉ニ感スル作用ニ外ナラス勿論飴糖モ糊精或ハ澱粉糖ト一般ニ多少ノ生出アリト雖共ニ漸次澱粉糖ニ變化スルナル可シ然レ𪜈其ノ作用ノ急ナラサル所以ハ元來米粒ハ實体ナルヲ以テ之ヲ溶解シ且化糖母ニ感セシムルヿ容易ナラサルニ由レハナリ是ヲ以テ米ヲ麹及水ト混和シ大槽ニ盛リ之ヲ放置スルノ日數ハ酒造家ニ因リテ異ナルノミナラス時アリテ一家ト雖本醋ノ成否如何ニ應シテ日數ノ伸縮ナキヿ能ハス即チ西ノ宮ニ於テハ混合ヲナス後一日ヲ經テ熱ヲ與フルト雖伊丹ノ如キハ適度ヲ料リ直ニ之ヲ熱シ或ハ五六日間ヲ隔テ、之ヲ熱スルヿアリト又東京ノ濁酒製造場ニ於テハ前ノ三品ヲ混セシ日ヨリ五日ノ午後三時頃ニ熱ヲ施スト云フ左ノ表ハ未熟セサル醋ニ就キテ分析セシモノナリ

	第三日午前八時收	第五日午前八時收
澱粉糖	七〇五三	一二〇二五
糊精	五〇一二	五〇六九
甘油、灰、蛋白質物	痕跡	四八
非散性酸	一七	一九
散性酸		八
水	八七〇五一三	八一〇五五三
回轉比率	百貳拾四度	百六度
醋液比量	一〇一五	一〇一八
同、溫度	攝氏拾三度	拾度
不溶性澱粉	二〇〇四三	一五〇四六

右ニ示ス如ク糊精ノ生スルアルモ麹ノ作用ニ遇ヒテ直ニ澱粉糖ニ化シ去リ其ノ現在スル量ハ第三日ノ醋中ニアル者ニ超エサル可シ而シテ尤意ヲ注ク可キハ澱粉糖ナリ第三日ニ至リテ猶多量ヲ殘スモ飴糖ハ些子ノ痕跡ヲ留メス現ニ撿糖器ヲ以テ醋液ヲ試査セシニ回轉比率百貳拾四度ヲ得又液中ノ溶解物ヲ秤リ之ヲ以テ糊精澱粉糖ノ二物ヨリ成ルモノト看做シ其ノ混合ニ適當スル回轉比率ヲ算定セシニ百貳拾三〇四度ヲ得タリ而シテ醋液ノ比重ハ漸々增スヲ見ル是澱粉ノ溶化シテ液中ノ澱粉糖ノ量相加ハルニ由レリ之ニ反シテ回轉比率ハ自ラ減殺スルナリ是糖類ノ加ハルタメ糊精ト澱粉糖ハ第五日ニ至リテ著シク增量スルニ由ル凡酒造家ニテ醋ヲ熱スルハ通例第五日午後三時ヲ度トス故ニ前ノ試驗ハ蓋其ノ將ニ熱セントスルモノ、成分ニ稍類スル時ナラン何レノ酒造家ニテモ桶ニ充テタル醋ヲ熱スル方法ハ皆一様ナリ之ヲ湯婆（ヌクメ）或ハ抱器（ダキ）ト唱ヘ沸湯ヲ長サ壹尺五寸形微シク楕圓ニシテ其ノ端ノ直徑一方ハ壹尺一方ハ八寸ノ器ニ容レ固ク封シテ之ヲ右三尺桶ノ醋液中ニ入レ全量ヲシテ溫度ヲ保持セシム此ノ湯婆ハ凡半日ヲ隔テ更ニ新者ヲ入レテ交代ヲナシ徐々熱ヲ强クス但シ湯婆ノ數ハ大氣ノ冷溫ニ由リテ一ナラス故ニ豫メ之ヲ定メ難シ伊丹ニテハ本醋造ノ始ヨリ終ニ至ル日數十三日トス此ノ間用フル湯婆ハ五個乃至九個トシ西ノ宮ハ十三日間拾個乃至拾貳個ヲ用フト云フ蓋醋ヲ熱スルニハ徐々之ヲ釀スヲ要ス決シテ急速ニス可カラス之ヲ急ニスレハ爲ニ酸釀ヲ起シ酒トナスニ至リテ酸味ヲ滯フルノ患アリ又濁酒製造ニ於テ始メテ湯婆ヲ加フルハ第五日ノ午後三時ヲ以テシ第八日ノ午後七時ニ至リ之ヲ罷メ醋液ヲ半切桶ニ移シ暫時之ヲ放冷シ第十四日ニ及ヒ酒造本段ニ着手ス

抑〻本醋造ニ於テ湯婆ヲ加ヘ之ヲ熱スルハ醱酵ヲ促スカタメナリ既ニ試驗ヲ施シ、第七日ニハ則氣泡液面ニ湧キ沸々トシテ殆ト桶ノ周緣ヲ超エントシ强辣（イラヒドキ）ノ氣鼻ヲ衝クニ至ル今第七日ヨリ第十四日ニ至ル間ノ分析表ヲ掲ク

	第七日	第十日	第十二日	第十四日
酒精	五〇二	八〇六一	九〇四一	九〇二〇
澱粉糖	五〇四	九九	四九	五〇
糊精	七〇〇	二〇八一	二〇七一	二〇五七
甘油灰蛋白質物	一〇一四	二〇八二	二〇三五	一〇九三
非散性酸類	三一	二四	三一	三〇
散性酸類	一五	一一	〇五	〇三
水	八〇〇八〇	八四〇四二	八四〇六一	八五〇四七
合計	一〇〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇
回轉比率	百三拾五度	百度七	百拾壹度	百拾六度
醋液比量	一〇〇八	一〇〇五	一〇〇五	一〇〇四
同溫度	貳拾三度	拾四度	拾度	九度
溶化セサル澱粉	一〇〇六八	一二〇四六	一二〇五五	一二〇〇五

夫酒精ノ發生ハ第五日午後三時ヨリ第七日第八時ノ間ニ盛ニシテ其ノ量ハ醋液ノ百分ノ五タリ是澱粉糖ノ變化ニ由レハナリ爲ニ其ノ糖ハ一二〇二五ヨリ五〇四ニ減シ糊精ハ之ニ反シ微シク增スト雖其ノ增加ニアラス他物ハ炭酸氣ト化シテ飛散スト雖此ノ物ハ依然トシテ存スルヲ以テ相比スレハ聊增ス所アルニ似タリ而シテ此ノ時澱粉ノ溶スル者ハ僅少ノミ又右表ヲ見ルニ第七日ヨリ第十四日ニ至ル間順等ヲ得サル者アルハ蓋試用シタル原料其ノ全体平均ノ處ヨリ得タル者ニアラサリシヲ以テナラン

夫酒精ノ量ハ日ヲ追ヒテ增スト雖澱粉糖ハ第七日ヨリ第十日間ニ於テ減スルヿ頗急ナリ遂ニ百分ノ一ヲ超エサルニ至ル又糊精モ百分ノ七ヨリ二〇八ニ減却シテ而シテ止ム是畢竟麹ノ勢力ヲ失スルカ爲ナラン

既ニ湯婆ヲ入ル、時ノ溫度ハ濁酒造ニ於テ攝氏貳拾三度トス西ノ宮淸酒造ハ貳拾度ナリ然レ𪜈之ヲ半切桶ニ移シ放置スル片ハ冷却甚シク此ノ際殘餘ノ泡釀ニ由リテ熱ヲ起スヿアレ𪜈猶此ノ溫氣ヲ蓄フルヿ能ハス加之其ノ分析ニ就キテ考フレハ殘餘ノ泡釀ハ倘急ニ降ルヲ以テ其ノ溫度ヲシテ大氣ト齊シカラシムルヲ防ク可シ然レ𪜈需用少ナルヲ以テ遂ニ漸ク冷却ニ歸ス可キナリ即第十日ニハ拾四度第十二日ニハ拾度第十四日ニハ九度ニ降ルニ至ラン

西ノ宮本醋ヲ濁酒ノ本醋ニ比ヘ大ナル差ナキハ左ノ分析ニ因リテ之ヲ見ル可シ

酒精	一〇〇五
澱粉糖	二
散性及非散性	五〇六
澱粉及纖維	一六〇五八
水	七二〇一六

此ノ本醋製造ニ於テ現レテ化學ニ關スル作用ハ至リテ簡易ノモノナリ初メ麹ト米トヲ水ニ混シ未熱ヲ與ヘサル前ハ麹ハ溶ケテ水様液トナリ即蒸米ニ反應スルヿハ前ニ記スルカ如シ此ノ溶シタル澱粉糖及

第159号　本文

糊精液ハ後熱シテ醱酵ヲ起シ適應ノ養料トナル醱酵益〻增長シテ糖料消失シ酒精ヲ造出スル時ニ當リ麴液ハ其ノ資ノアラン限澱粉ヲ化シテ糊精ニ變スト雖再ヒ澱粉糖ニ化スルノ力ヲ絕タサルナリ然レ𪜈本醅ノ全ク熟セントスル前ニ當リ麴ノ作用モ殆ト消滅スルカ如シ此ノ本醅製造將ニ終ラントスル際ハ醱酵微々タリト雖是其ノ力ヲ失ヒタルニアラス新ニ含糖液ヲ加フルトキハ更ニ麴或ハ酒母ヲ加ヘサルモ自ラ再起ス可シ故ニ本醅製造ノ要ハ首ニ醱酵ノ良質ナル者ヲ造出スルニ於テハ乃後段ニ至リテ以テ良醞ヲ釀成ス可キナリ

酒造工ノ長ヲ杜氏（トウジ）ト云フ本醅釀ノ盛ニシテ將ニ適度ニ達セントスルヲ候ヒ其ノ溫熱ヲ止ムルコヲ掌ル其ノ法タルヤ泡沸ノ度ヲ視テ醅液ヲ味フルニアリ其ノ味三日目ニハ甘シ是猶多量ノ糖類ヲ含ムノ徵トス六日目ニハ澁ク七日目ニハ辛ク終ニ酸味ノ起ルヲ度トシ以テ熱ヲ止ムルナリ今伊丹ノ法ニ據レハ通常前後十三日ヲ終テ正ニ適要ノ味ヲ發スト云フ抑〻甘酸苦澁辛ノ五味ヲ發シ始メテ本醅成熟ノ期トナス蓋酸味ハ五日ヨリ七日間ニ生スル者トス

○明治十六年十月中驛遞局及郵便局ニ於テ取扱ヒタル郵便爲替受拂高略表左ノ如シ（農商務省報告）

名稱	爲替取扱局數	爲替料收入金	振出		拂渡	
			証書枚數	金高	証書枚數	金高
東京府	三一	三三七 八九〇	三、八〇一	四〇、五五五 三四四	一八、九〇七	一五五、七五七 六一四
京都府	三三	一一〇 一三〇	一、三四八	二二、五六二 一七八	二、四七二	二八、八三一 一九七
大阪府	二七	二三四 〇〇〇	一、七四五	一四、五〇八 二三〇	四、〇四九	四四、二五一 五五三
神奈川縣	一九	一二五 六六〇	一、四三三	一四、八八八 三九七	九五七	八、六六二 四〇〇
兵庫縣	三三	一二四 〇五〇	一、四六四	一四、一六二 九〇九	九九三	一〇、四七七 五九八
長崎縣	一〇	九九 二九〇	一、〇三三	一二、〇七五 〇五八	五三八	五、七二二 一三七
新潟縣	二八	二六九 三四〇	二、八四四	三二、三一七 〇〇九	一、七五八	二五、一三〇 四八三
函館縣	四	一一七 五九〇	九八一	一五、六六三 一五九	三〇〇	四、〇六四 一八二
埼玉縣	一九	六一 二一〇	六九五	七、一六六 八八八	四〇五	五、三九八 七〇三
群馬縣	二〇	一二三 五一〇	一、一〇〇	一五、八六〇 二六六	四四七	四、七二二 四八九
千葉縣	二七	一〇九 一四〇	一、二八〇	一二、六八一 三〇四	六六九	五、八四一 六二四
茨城縣	三一	一一七 五六〇	一、三七九	一三、五一二 〇六四	七五八	九、一九七 二〇五
栃木縣	二七	六七 九六〇	八〇二	七、七八一 七八四	六六四	九、四八三 六六〇
三重縣	一六	六四 七四〇	八三〇	七、〇八一 五七九	六三四	六、五四六 四七六
愛知縣	四九	一二〇 二〇〇	一、六一〇	一二、八三三 九八九	一、六五一	一七、六五九 六〇六
靜岡縣	二五	一三二 四四〇	一、四七九	一五、六五〇 五五九	六七七	六、九九三 九五三
山梨縣	一二	六六 〇三〇	七四七	七、七二二 一六六	三〇三	三、八六八 七一〇
滋賀縣	一三	五〇 六〇〇	六二八	五、六八九 八一四	六五三	九、〇二三 二六八
岐阜縣	二八	九九 四四〇	一、二四六	一一、〇五七 三六二	五八〇	五、八六八 九四八
長野縣	二七	二〇七 六七〇	二、二〇七	二五、〇七一 二五六	九三六	一二、九七八 〇六一
福島縣	三二	二〇三 四一〇	二、一一五	二四、六八六 一三五	九九六	一一、九一一 二七一
宮城縣	二四	一一六 三五〇	一、三二九	一三、五八七 七一六	九九三	一一、三七六 二三八
岩手縣	一八	八七 六一〇	九三四	一〇、五五七 三〇八	五八二	六、六四二 九六四
青森縣	一一	七四 八七〇	八〇〇	九、〇〇〇 五五六	四〇一	四、一七四 六八九
秋田縣	一四	一五六 六六〇	一、五六三	一九、一六三 一三四	七四〇	七、五二五 一六三
山形縣	一七	一五七 八四〇	一、四六二	二〇、一〇四 〇二〇	六三四	八、六七二 五二九
石川縣	一七	九一 七七〇	一、〇三〇	一〇、七八五 四〇一	一、〇九〇	一四、一二一 八五四
富山縣	一五	七一 〇七〇	七八九	八、三三八 九二三	一、三五八	二六、七九四 〇七二
福井縣	一五	九四 二二〇	一、〇六六	一〇、九五七 九四七	六六九	八、七七一 〇二七
島根縣	一三	八五 三三〇	九四四	九、九四〇 三一三	四〇三	五、〇〇九 八二五
鳥取縣	九	五二 二七〇	六五七	五、七七二 九二六	三九四	五、〇五三 七一五
岡山縣	二四	九七 〇二〇	一、一八六	一〇、八六〇 一五九	六八二	七、三〇三 六一七
廣島縣	二七	一〇四 〇五〇	一、二二八	一一、八三八 七四四	一、二〇七	一三、六二九 四五九
山口縣	一九	一三四 二二〇	一、四一八	一六、一一五 二八四	九四三	一一、〇五一 三七四
和歌山縣	一七	四七 八二〇	五五三	五、五四七 九三五	五八九	六、一二七 八五〇
德島縣	一〇	三二 三六〇	四一〇	三、六一五 三〇六	四六七	八、六一九 〇一二
高知縣	一五	四四 三〇〇	五三四	四、九二八 九六七	三九八	三、五五二 九八五
愛媛縣	二八	一二二 四六〇	一、三八一	一四、三二〇 二七九	七三六	六、八四三 〇七九
福岡縣	一八	一三〇 四七〇	一、四九八	一五、一一二 七三九	九五二	九、九〇八 九二八
大分縣	二五	八六 九五〇	一、〇三九	九、八一九 一二一	六二三	六、二八五 九七八
佐賀縣	一一	五八 三三〇	六二六	六、九七九 四七五	三七三	五、二〇八 四七〇
熊本縣	一七	九七 五七〇	一、〇五〇	一一、七一四 七三八	七一五	七、七三三 九八四
宮崎縣	六	四六 四一〇	四六二	五、七二四 六四三	一一七	一、五一七 〇二七
鹿兒島縣	五	五三 九八〇	五五三	六、五六四 〇五六	四一六	四、二八〇 一六二
札幌縣	四	五一 一九〇	五七四	六、一四八 一六三	九六	一、〇六八 一六九
根室縣	一	八 〇六〇	九四	九四四 三五八	九	一三二 六六〇
朝鮮國	二	三 九〇〇	三七	四八〇 〇三五	七	七九 四〇〇
淸國上海	一	六 二〇〇	三四	六二三 八四〇	〇	〇
合計	八八二	四、八五五 一三〇	五四、〇〇六	五七三、一五二 五三六	五四、八六二	五八三、八八六 三六八

○海員及第（農商務省報告）　大坂海員試驗所ニ於テ昨年十二月十六日ヨリ仝月廿八日迄海員技術ノ試驗ヲ受ケタル群馬縣士族三田村鐘三郎ハ甲種壹等運轉手ニ大坂府平民讚岐芳平兵庫縣平民脇濱小太郎和歌山縣平民川崎治郎左衞門ハ乙種船長ニ廣島縣平民嶺園太郎ハ仝種壹等運轉手ニ仝縣平民里田岩吉愛知縣平民高須元次郎山口縣平民伊村吉三郎岡山縣平民橋本秀吉熊本縣平民千成權次郎ハ仝種貳等運轉手ニ滋賀縣平民堀井由松大坂府平民福島留藏鹿兒島縣平民長崎武八郎仝縣士族中島岩次郎ハ仝種貳等機關手ニ及第シタリ

○外報

○千八百八十三年（即チ明治十六年）佛國養蠶景況（昨年十月二十二日刊行佛國官報）

		平均
州數	二四	
養蠶家數	一五一、四〇四	
孵卵セシ各蠶種ノ卵量（一オンスヲ單位トス）		
佛國種（佛國種蠶ヨリ生セル地方産）	二九四、一二〇	
輸入シタル日本種	五、一一八	
佛國ニ於テ飼育セル日本種	六、二一二	
外國産蠶種	一三、二九五	
合計	三一八、七四五	
同上ノ蠶種ヨリ得タル生繭全額（基ヲ單位トス）		
佛國種（佛國種ヨリ生セル地方産）	七、〇三一、一三七	百分ノ九一、七九
輸入シタル日本種	一四四、一〇九	百分ノ一、八九
佛國ニ於テ飼育セル日本種	一三八、七一二	百分ノ一、八一
外國産蠶種	三四九、八七七	百分ノ四、五一
合計	七、六五九、八三五	
蠶卵一「ヲンス」（廿五「グランム」）ノ生繭平均ノ産額（基ヲ單位トス）		基
佛國種（佛國種蠶ヨリ生セル地方産）		二三、九〇五
輸入シタル日本種		二八、一五七
佛國ニ於テ飼育セル日本種		二二、三六五
外國産蠶種		二六、〇一五
合計		二五、一一一

第159号 本文

第159号本文

飼養者ヨリ卵紙製用ニ充テタル繭

卵紙用ノ繭（基ヲ單位トス）	一四八、九二八
此ノ繭ヨリ得タル卵量（一「オンス」ヲ單位トス）	三九三、九一六

	法
一「オンス」ノ賣價	
佛國種（佛國種蠶ヨリ生セル地方產）	一三、三○
輸入シタル日本種	一四、九五
佛國ニ於テ飼育セル日本種	一五、七五
外國產蠶種	一三、九○
生繭一基ノ價格	
製絲ノ爲メ賣却セシモノ	
佛國種（佛國種蠶ヨリ生セル地方產）	三、九一
輸入シタル日本種	三、七○
佛國ニ於テ飼養セル日本種	三、九一
外國產蠶種	三、五四
卵紙ノ爲ニ賣却セシモノ	
佛國種（佛國種蠶ヨリ生セル地方產）	五、○○
輸入シタル日本種	四、一六
佛國ニ於テ飼養セル日本種	六、○○
外國產蠶種	五、四三

○氣象

○地理局報告

全國氣象摘要　氣壓ハ中央及ヒ北部ニ於テハ絶エス上昇シ九州ニ於テハ微ニ低下セリ○東及ヒ北部ニ於テハ北西風又ハ疾風ノ所モアリ西部ニ於テハ方位不定ノ軟風吹ケリ○天氣ハ本地ノ西、或ハ北西部ニ於テハ陰天其他ハ快晴又南部ハ寒冷ナリ○溫度ハ下ノ關ニ於ケル零度岐阜ニ於ケル氷點十度ノ間ナリ○前廿四時間ニ本地ノ北西部ニ於ケル各所ハ小雪降リ新潟ハ十四（ミリメートル）ノ降雪ヲ報セリ○札幌ヨリ電報達セス

全國氣象一月十一日　（京都時午前六時東京時午前六時十六分長崎時午前五時三十六分）

測候所	晴雨計	風向	風力	雨量	溫度	天氣
長崎	七七三	—	—	—	九七	快晴
鹿兒島	七七三	北	一	—	九九	晴
宮崎	七七三	北西	一	—	九六	快晴
高知	七七二	北東	一	—	九七	仝
和歌山	七七一	北	一	—	九九	曇
廣島	七七三	北	一	—	九七	仝
大坂	七七一	北東	一	—	九六	仝
京都	七七一	—	—	—	九四	快晴
下ノ關	七七三	—	—	—	○	曇
境	七七二	南	一	四	九九	仝
金澤	七七○	南東	一	九	九七	雪
岐阜	七七○	—	—	二	九○	快晴
濱松	七六七	北西	四	—	九八	仝
沼津	七六六	北東	二	—	九三	仝
東京	七六六	—	—	—	九四	仝
新潟	七六八	北西	三	一四	九八	晴
秋田	七六五	西	四	—	九六	雪
野蒜	七六三	北西	二	—	九五	快晴
宮古	七六一	西	一	—	九四	仝
青森	七六二	—	—	三	九三	雪
函館	七六一	北	一	—	—	曇
札幌	—	—	—	—	—	—

例言　晴雨計ハ佛匣（ミリメートル）ヲ用フ○風向ハ眞方向ヲ示ス○風力ハ配方零ヨリ六ニ至ル（○ハ靜穩一ハ軟風二ハ和風三ハ疾風四ハ強風五ハ暴風六ハ颶風）ヲ示ス○雨量ハ前二十四時間ノ量ヲ佛匣（ミリメートル）ヲ以テ示ス○溫度ハ陰所ニ於テ攝氏ノ度ニ從フ（氷點ハ○氷點上ノ十及二十度ハ一○及二○氷點下ノ十及二十度ハ九○及八○）

○海軍觀象臺報告

一月十一日		午前三時	仝九時	午後三時
風雨鍼	英寸	三十寸二一七	三十寸二三六	三十寸一八七
寒暑鍼	華氏	二十五度○	三十五度○	四十六度○
濕氣	（一ヨリ百ニ至ル）	九十四	九十○	五十二
風	方位（八點ニ區分ス）	西	北西	南西
風	速力　英里	八里	四里	八里
天候	（陰部一ヨリ十二ニ至ル）	全晴	快晴　陰部一	快晴　陰部一

記事

寒暑鍼（高極四十六度○　低極十六度一）（午前零時ヨリ午後三時ニ至ル間ノ實驗）

天候ハ昨十日午後三時後漸々快晴同九時頃地震シ今曉朝照アリ爾後引續キ快晴○風ハ昨午後九時頃ヨリ方位北西ニ轉シ今午前三時頃ヨリ西ニ移リ同九時前ヨリ暫時北西ニ歸リ後更ニ南ニ轉ス速力ハ昨午後三時ヨリ今午前三時迄ノ平均約十三里後稍衰ヘ同九時迄ノ平均約四里○風雨鍼ハ昨日來漸次上昇セリ

○廣告

○書籍刊行廣告

明治十四年六月廿四日板權屆

一扶氏藥劑學（第一冊　柴田承桂譯）　壹冊

定價金壹圓五拾五錢

明治十五年二月十八日板權屆

一仝（第貳冊　柴田承桂譯）　壹冊

定價金壹圓五拾六錢

明治十六年十一月二日板權屆

一維氏美學（上冊　中江篤介譯）　壹冊

定價金五拾三錢

右刊行ス

明治十七年一月十二日　文部省會計局

○廣告

一職獵免狀　第三萬五千百貳拾六號

鹿兒島縣下鹿兒島郡生產町前田森吉所持ノ處客年十二月六日遺失

右屆出候條拾得候者ハ速ニ管廳ヘ可屆出事

明治十七年一月十二日　農務局

○廣告

本校私費生徒二十五名ヲ限リ試驗ノ上入學可差許候條年齡滿十八年以上二十五年以下ニシテ入學志願ノモノハ願書ニ郡區（寄留人ハ其郡區）長ノ奧印ヲ受ケ學業履歷書相添正副二通來ル二月十日迄ニ本校ヘ差出スヘシ

但諸規則願書式等ハ本校ヘ承リ合スヘシ

入學試驗科目

第一　和漢書講義句點　第二　講義書取（獨英佛學ノ内）

第三　作文（但眞片假名交リ）　第四　歷史通讀講義

第五　算術（但平方立方以下）　第六　山林事業

第七　体格

明治十七年一月九日　東京山林學校

○明治十六年十二月中留置音信廣告

月日	發信人	受信人	
十二月九日	村上片町　尾崎又五郎	羽前加茂港小波渡村　ショウゼンマルヨソウタ	
同月十四日	山形縣　土木課	鶴岡五日町百十六番地兼子方　上林孝治	出立後
		右鶴岡電信分局	
十二月十四日	愛媛縣	ナカタド郡役所ニテ大政官御用掛　タケシタ ヤスユキ	未着
同月廿五日	松山　安西	丸龜鹽谷村カイホリニテ　安西	
同月廿六日	岡山キヱイシヤニテ　兵庫丸	多度津滊船會社　兵庫丸	
		右丸龜電信分局	

第159号本文

十二月	十九日	岐阜今町　セキヨリ	中津川苗木村　吉田ミツヨシ宛
			右中津川電信分局
十二月	三日	司法省第九局　高木大書記官	岩内治安裁判所出張處　三津御用係（出立後）
			右岩内電信分局
十二月	十一日	石ノ巻　鈴木源作	蠣殻町二　舛本喜作
同月	同日	仙臺一番町　千葉タ子マサ	南鍛冶町一ミカサヤ方　ケンモツパンシウ
同月	同日	宇治ヲワハクサン　ハヤレ	東新堀一中澤ニテ　タイプツ
同月	同日	出石松枝町　田中ヨシアキ	蠣一二番地アイタ方　ナカジヨウ
同月	十二日	八戸番町　中村小太郎	本銀町十三番地松本方　平田萬次郎
同月	同日	上諏訪　土橋榮吉	大坂町上總屋方　矢島吉次郎
同月	十三日	横濱相生町　イセイタメゾウ	神田佐柄町　星野屋十兵衛
同月	十四日	高田　相澤勝作	小柳町十五番地三河屋方　野俣惣治
同月	同日	キタツル郡　ヲマタキク	北槇町四中村方　ヲマタサナイ
同月	十五日	宇都宮一條町小野屋方　和田セツ	八丁堀仲町木村方　星野喜三郎
同月	同日	長野　丸山昇	槇町一鈴木方　丸山
同月	十六日	八戸番町　中村雄太郎	本銀町十三番地松本方　ヒルタマンジロ
同月	十七日	北津輕郡カセユラ　山中隆助	松坂町十三番地　立山仙之進
同月	同日	箱館　桶川福造	水谷町鈴木方　川岸眞助
同月	同日	徳島始審裁判所　伊東判事	司法省ニテ　安井判事（出立後）
同月	十八日	秋田茶町　第四十八銀行	小船一　第三銀行
同月	十九日	三春　桔梗屋	小網町三上總屋方　桔梗屋藤三郎
同月	廿日	尾張國熊野村　梶田助左衛門	錦町一鈴木金次郎方　飯田榮助
同月	同日	大坂　岩田ミツウ	大傳馬町二　播摩屋豐吉
同月	同日	横濱　神奈川縣令	鍛治町四番地ホソイ方　石田長崎縣令（出立後）
			右日本橋電信分局

右留置音信心當リノ者ハ自身罷出候歟又ハ書面ヲ以可申出候事

明治十七年一月　　電信局

○郵便沒書廣告

○日本橋區濱町二丁目拾二番地松坂直次郎宛鍛冶町西尾先之助○淺草諏訪町七番地鈴木鉄方鈴木千代宛本所ゟ○横濱前田橋際百四番地竹内林宛竹内哲五郎○東京淺草魚山虎魂方二縣三之助宛渡瀬永市○一ノ關大町龜屋孫左衛門方瑞岩寺宛佐々木孝三郎○粟田郡小坂村綾文宛大津ヨリ○大坂府下袋町二丁目四十八番地西川太兵衛宛大津池田榮治郎○俵屋おちか宛大津ㇾぶ○大津突拔桶屋町ニテ鹽折宛藤井半次郎○越前國武出馬面丁與平宛江州鹽津ニテ助治郎ゟ○西京ゐのくまたゐや柳本喜太郎内おとき宛大津西川ちせゟ（右一月九日分）

右心當リノ者ハ爲受取驛遞局ヘ罷出候歟又ハ書狀ヲ以テ申越候樣可致事

明治十七年一月十二日　　驛遞局

○郵便船出發廣告

本日午前十一時本局締切敦賀丸ヲ以テ神戸ヘ向ケ郵便差立候事

本月十五日午前十一時本局締切伊勢丸ヲ以テ神戸ヘ向ケ郵便差立候事

本月十八日佛船メンザレー號ヲ以テ香港印度歐羅巴ヘノ郵便物締切時限

府下郵便局　（書留郵便物ハ午後四時）（並郵便物ハ午後五時半）

驛遞本局　（郵便爲替ハ十七日午後三時）（書留郵便物ハ午後五時半）（並郵便物ハ午後七時）

横濱郵便局　（書留郵便物ハ午後十時）（並郵便物ハ午後十一時）

明治十七年一月十二日　　驛遞局